＜論文＞

成人の学習者において他者との関わりが学習動機づけに与える効果
― 街にある語学教室の事例 ―

横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程前期修了　**岡田　真作**
横浜国立大学　**安藤　孝敏**

Motivational effect of talking with people on adult learners
− Case study of a local language school −

Shinsaku OKADA
Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University
Takatoshi ANDO
Yokohama National University

要旨

本研究の調査の対象は、街中にある一般的な語学教室に通う成人学習者である。変容的学習理論（準拠枠変容）に基づいて、他者との関わりが学習動機づけ向上をもたらしたという経験を分析し、学習動機づけ維持向上の要因を明らかにすることが目的であった。

調査は、モチベーション変容グラフを用いて可視化しつつ、半構造化インタビューを成人学習者 20 名に行った。可視化された動機づけの変容図はインタビューを受ける者にとっても再確認しやすいものであった。言語記録の分析は、SCAT 分析手法を用いた。分析により抽出した構成概念を学習者タイプと学習期で整理し検討することで、タイプごとに他者との関わりが学習動機づけに与える条件について結果を得た。さらに、入門期と継続期の学習動機づけの低下頻度の差に焦点を当てると、準拠枠変容経験を積むことで継続期の学習者に変遷することを指摘できた。得られた知見から、他者との関わりが学習動機づけ向上に与える効果の要因を明らかにした。

Abstract

This study is conducted to examine adult learners who go to local language schools. Using transformational learning theory (change of reference frame), we analyzed whether experiencing an improvement from talking with other people is one of the factors that maintain the student's motivation and continuous improvement in language learning. Next, we conducted semi-structured interviews with 20 adult learners and graphed their change in motivation, making it easier even for the learners to visualize their progress. We analyzed the results using the framework concept in the SCAT method and arranged the students based on their type and period of study. This study found that the learners who talk with people are more motivated to learn. Furthermore, by taking into consideration the frequency of decreased motivation in both new and current students, the change of reference frame indicated a trend on both students towards becoming a continuing student.

1. はじめに

近年、マサチューセッツ工科大学が世界に先駆けて試みた、大学の全授業を web 上で公開するオープンコースウェア（Open courseware; OCW）が、遠隔教育関係者や教育関係者一般から広く注目を集めている。オープンコースウェアとは、大学や大学院などの高等教育機関で正規に提供された講義とその関連情報を、インターネットを通じて無償で公開する活動のことである。さらに、オンラインで公開された無料の講座を受講し、修了条件を満たすと修了証が取得できるムーク（Massive open online course；MOOC）という教育サービスが急速に広がりをみせており、今後の高等教育の在り方を大きく変える可能性を持つと考えられている。しかし、修了者率についてオンライン学習サービスの Udacity[1] を例に見てみると、2015 年 4 月で受講者 160 万人中、最後まで受講した人数は 8 万人～ 16 万人で、割合に直すと 5 ～ 10% であった。このことに対して、中心的設立者のセバスチャン・スランは、「We have a lousy product」（我々はお粗末なプロダクトを提供している）と述べている。低い修了者率の理由はさまざま考えられるが、理由の一つとして自律性の低下、すなわち学習モチベーションの低下の存在は大きいのではないだろうか。オンライン教育イノベーションは「独りで学習動機づけを維持できる者は少ない」という、

[1] Udacity（https://www.udacity.com/）は、Google や Facebook などの企業と協業して講座を設計し、Web 開発、フルスタックエンジニア、モバイル開発、データ・サイエンスなどのオンライン学習サービスを提供する、テクノロジー業界が作る「新しい形の大学」である。

学習環境の根本的問題を浮き彫りにしたのではないだろうか。

日々多くの成人学習者が学習を開始し、多くの学習者がやめている。成人学習者の学習継続の難しさについては、筆者が運営に関わる語学教室を含め同業他社を通して経験してきた。その経験から、カリキュラム改善以外の工夫の一つとして、成人学習者が自然に行っている他者との関わりの効果について関心があった。街の語学教室に通う成人学習者を対象とすることで、より多くの成人学習者が対象となり、本研究によってカリキュラム改善以外の動機づけの工夫の効果が示されれば、義務教育以外での教育（生涯教育）の普及につながると考える。これまでの研究では、成人学習者の動機づけを研究したものは通信大学など修了証が得られる環境でのアンケート調査が多く、成人学習者の動機づけを高めるための仕組みや他者が動機づけを与える視点での研究が多かった。本稿では、修了証などを意識しない街中にある一般的な語学教室に通う学習者を対象にインタビュー調査を行い、自らの動機づけを向上させるための工夫について研究したところがこれまでの研究とは異なる。

2. 成人学習者と他者が関わる動機づけの理論

2. 1 成人学習者

生涯学習は、自分が学び続けたい腕を磨き続けたいと思えば、それはいつまででも取り組むことが出来る。その動機づけの強さについて、秋山（2012）は、「おとなが学ぶことは自ら得た賃金をその学習活動に費やし、従来までの『教えられる』学習活動ではなく、自らの課題を意識し学習のプロセスや目標値を学習者自身が決定する自己決定型学習であることからも、学習に対するモチベーションは高等教育以外の学習者とは対比できないものがある」（p.201）と述べている。しかし、成人学習者のその動機づけも低下することがある。例えばアスコー（2013）は、「どんなに明確な学習の目的があり、目標を詳細に意欲的に始めた学習でも、目標がある程度達成されたり、もしくはある一定期間が過ぎたりすると学習意欲は低下してくることがある。さらに、目標に近づく為には、学習意欲を再度高め、また維持する必要がある」（p.55）と述べている。

自律的であることが特徴の成人学習者でも自律性・動機づけの低下があり、低下させたくなければ工夫が必要なのである。金井（2012）は、「生活の上で必要な分野、あるいは趣味や仕事で入門したからには、上手になりたいと思っている分野では、人は、自分なりにやり方を工夫する」（p.335）と述べている。その工夫の一つとして、他者との関わりがある。秋山（2012）は、「生涯学習活動全般的に、学習者は共に学ぶ相手を求める傾向がある。つまり、何かを学ぶ目的は結果であり、その結果に辿り着くまでのプロセスを重要視することで、学習者同士のつながりやコミュニケーションによって日々の学習活動のモチベーションを維持していくことが多い」（p.200）と述べており、共に学ぶ相手を作ることは自然に行われていることなのである。

ただし、動機づけを得る工夫として思い通りに活用できるとは限らない。確かに、他者との関わりと言っても様々であり、学習者の目的もさまざまであることから、一様に他者との関わりが学習動機づけ維持・向上に効果があるとは言えないだろう。

2. 2 学習と動機づけ

効果のある学習について、Corte（2010）が CSSC 学習としてまとめている。CSSC 学習とは、適応的コンピテンスの向上を目的としており、学習者が知識とスキルを積極的に構成する「構成的」であること、人々が学習方略を積極的に活用する「自己調整的」であること、環境から抽象化されるよりもむしろ文脈の中で「状況的」に十分に理解されること、そして単独の活動ではなく「共同的」に行われることの 4 点を特徴とする。

動機づけに関わる考え方は、肯定的でも否定的でもありうる。Boekaerts は、感情と動機の役割に関する知見をいくつかの原則に要約した。「生徒がいっそう強く動機づけられて学習に取り組むのは、彼らが、1）期待されていることを十分にやることができると感じ、行動と達成との間に安定した関連があると認識するとき、2）教科に価値を見出し、明確な目的意識を持つとき、3）学習活動に肯定的な感情を経験するときであるが、逆に否定的な感情を経験すると学習から関心をそらしてしまう。そして、4）環境が学習に望ましいと認識するときである。生徒は、感情の強さ、長さ、そしてその表出に影響を与えることができるとき、学習に対する認知的リソースを自在に扱うようになる。さらにそのリソースを使いこなし障壁にうまく対処することができるとき、学習にがんばって取り組むようになる」（Boekaerts,2006）。

表1　インタビュー対象者の特徴

名前	性別	年齢	職業	英語が得意科目であったか	学習を始めた理由	現在の動機	学習継続期間
A	男	20 代	会社員	不得意	留学準備	転職に必要だから	1 年
B	男	30 代	会社員	不得意	海外旅行準備	仕事で活かす	4 年
C	女	30 代	会社員	得意	興味	興味	4 年
D	男	30 代	会社員	得意	将来のため	将来のため	1 年
E	男	30 代	会社員	不得意	興味があった	興味が尽きない	5 年
F	女	30 代	会社員	不得意	興味があった	趣味	8 ヶ月
G	女	30 代	経営者	不得意	仕事で使う	趣味仕事	2 ヶ月
H	女	30 代	教員	不得意	旅行で使うから	趣味仕事	3 ヶ月
I	男	40 代	会社員	得意	外国人に憧れ	仕事で使う	15 年
J	女	40 代	会社員	不得意	趣味	趣味	20 年
K	男	40 代	会社員	不得意	外国人と結婚	将来のため	10 年
L	男	40 代	行政書士	不得意	仕事で使いたい	仕事	3 年
M	男	40 代	会社員	不得意	興味	なりたい自分がある	17 年
N	女	40 代	会社員	得意	興味があった	趣味	5 年
O	女	50 代	芸術家	不得意	海外旅行	海外で仕事をしたい	28 年
P	女	50 代	会社員	不得意	趣味	資格取得	8 年
Q	男	50 代	経営者	得意	親族が外国人	なりたい自分がある	1.5 年
R	男	60 代	経営者	得意	息子の留学	今はない	30 年
S	男	60 代	定年退職	不得意	趣味仕事	趣味	40 年
T	女	60 代	定年退職	不得意	趣味仕事	趣味友人に誘われて	30 年

2. 3　変容的学習理論

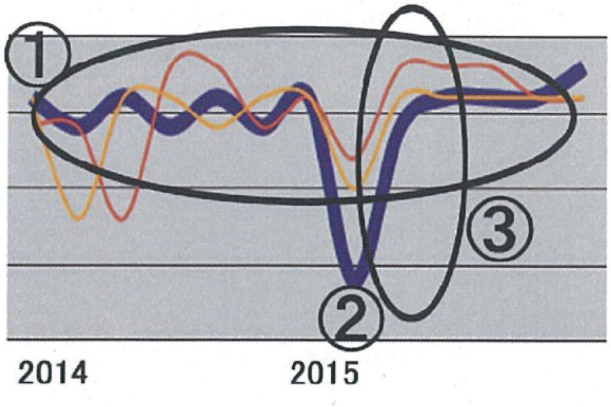
他者との関わりが学習動機づけに与える効果の要因に焦点を当てると、準拠枠変容は重要な役割を持つ。個人の意識が変容するためには、その経験を省察する必要がある。個人の省察に着目して「変容的学習」の理論を提起し、成人の学習に関する理論に大きな影響を与えたのが Mezirow（訳書 2012）である。変容的学習とは、「批判的な振り返りを通じ、モノの見方・感じ方・行為の仕方の習慣的な枠組みである準拠枠を変えていくような学習」（常葉 2004, p. 87）を意味している。また、常葉（2004）は変容的学習理論(準拠枠変容)について、「想定の問い直しや吟味と言った活動は、個人が孤立した状態では十分に行えない。他者とのやりとりや知識・経験の共有が不可欠である。討議は、他者との交流の中で、問い直しや吟味、物事への妥当性について判断を得る為の方法」（p.100）と述べている。つまり、変容的学習の経験とは、疑問視することもなかった自らの準拠枠への問い直しと、新たな準拠枠の獲得である。

新たな準拠枠の獲得（準拠枠変容）経験のプロセスは次にように示されている。①新しい知識・経験を得ると、成人学習者は自らの準拠枠に基づく妥当性について判断（省察）を行う。判断は肯定、否定、矛盾である。肯定であれば、新しい知識・経験に同化される。否定であれば却下である。矛盾の場合は解決できない問題にジレンマを抱えることになる。例えば、「今まで理解できた。しかし、講師が変わったら分からなくなってしまった」といったものである。②ジレンマの解決は、自らの準拠枠の批判的検討、そして、準拠枠の再構築を経て、新たな準拠枠を獲得する。

3. 目的

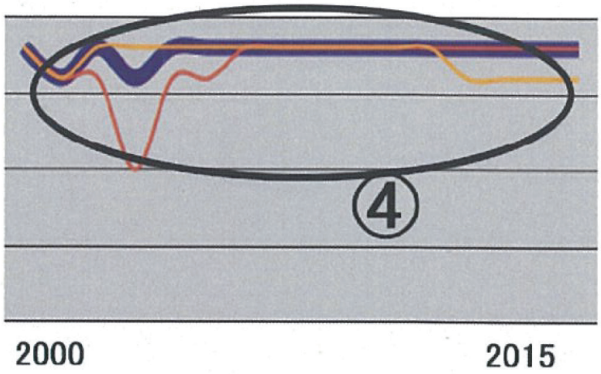
本研究は、学習継続の要因を明らかにするという目的を設定した。そのために学習者タイプごとの学習動機づけ向上の条件を明らかにすること、さらに、変容的学習理論（準拠枠変容）に基づいて他者との関わりが動機づけ向上に与える効果の要因を明らかにする。なお、この研究では、自由な成人学習者に対して不自然に動機づけ向上をさせようと考えるものではない。街にある語学教室に通う成人学習者を対象として、「他者との関わりが学習動機づけ向上に与える効果」を分析し、「学習継続の工夫」の効果を明らかにしようとす

図1．入門期のモチベーション変容グラフ
（インタビュー対象者 F,G,H の例）



【図 1】
① 入門期の特徴は、動機づけの低下の波が多い
② の時点では、講師が変わり、同じクラスの 3 人ともジレンマが発生し同時に動機づけが低下
③ の時点では、準拠枠変容経験獲得の助け合いがあって動機づけが向上

図2．継続期のモチベーション変容グラフ
（インタビュー対象者 C,I,N の例）



【図 2】
④ 継続期の特徴は、動機づけ低下の波が少ない

るものである。また、本研究は学習カリキュラム以外のことで何が必要かという教室マネジメントの問いの一つに応える側面も持つ。

4. 方法

調査対象者

対象者は語学教室に通う成人学習者 20 名（内訳：20 代 男性 1 名、30 代 男性 3 名・女性 4 名、40 代 男性 4 名・女性 2 名、50 代 男性 1 名・女性 2 名、60 代 男性 2 名・女性 1 名）であった。対象者の選択は、社会人のみを対象として、熟達度、学習期間、男女の比率に偏りが出ないように意識した。この語学教室は横浜市の官庁街および商業地域の駅から近い場所に教室を構えており、生徒数 200 名程度の小規模教室ではあるが、入学規制をするほどの満席状態を維持した教室運営が行われており、教室の中は人が多くて賑やかさが特徴の教室である。調査時期は 2015 年 2 月～ 8 月であった。

調査方法

インタビュー調査はインタビュー用紙とモチベーション変容グラフを使用した半構造化面接であった。モチベーション変容グラフを作成することで、自分がどういう時にやる気が高まって、どういう時にやる気が下がったのかという自身の動機づけを振り返ることができる。インタビュー予約は、レッスン後の対象者に話しかけ、インタビューが可能な時間を伺って決めた。時間は一人につき一時間程度であった。聞き手は語学教室の関係者であることから、教室運営のインタビューではなく、学術的なインタビューであることを丁寧に説明し、信頼性と中立性の維持を心がけた。インタビュー項目である学習者の属性は、性別・年齢などの基本属性、職業、習熟度、学習目的、学習期間であった。学習の動機づけが変化した経験については、学習開始時と現在、低下した経験・向上した経験、他者が関わったことで動機づけが向上した経験（その時の他者との関わり方）を聞いた。特に、学習動機づけに影響を与えた他者について詳しく聞くために、外的な刺激すべてを対象（人、モノ、情報）とした。また、自らが持っている動機づけ向上の工夫についても聞いた。モチベーション変容グラフの利用は、ストーリーとして動機づけの変化を捉えるために点を記してもらいながらインタビューを進めた。特に、他者が関わったことで向上した動機づけの前後のストーリーについては、他者とはどのような存在か、どうして動機づけ・自律性に効果があったのかを丁寧に聞いた。インタビューの場所は語学教室の一室であった。インタビュー調査は個人情報の取り扱い、倫理的配慮について説明し、承諾を得てから行った。

5. 分析方法

質的研究のためのデータの分析手法であるSCAT分析は、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、①データの中の着目すべき語句、②それを言いかえるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し，そこから理論を記述する手続きからなる分析手法である（大谷, 2007）。本研究ではSCAT分析を使い、次のような手順でインタビューデータを整理・検討した。

① インタビューデータ（20名分）を一人ずつ、他者との関わりが学習動機づけに影響を与えたストーリーの変化前、変化点、変化後に焦点を当ててSCAT分析を行った。
② 抽出した概念（変化前、変化点、変化後）を学習期の「入門期」「継続期」で分類し、類似した概念を整理した。学習期に関しては上淵（2012）が、自己制御学習理論（他者との相互作用から自己の学習が成立する）において、「初心者にとって自力では自己の学習の適切な対象化や表象化が難しいことを考えれば、他者との相互作用や支援は不可欠かもしれない」（p.290）と述べており、それを参考に入門期と継続期の違いに注目した。入門期とは、自らの意思で学習を開始してから「動機づけの波が落ち着くまで」とし、以降は継続期とした。
③ 抽出した概念（変化前、変化点、変化後）を学習者タイプの「生活趣味型」「実用技能型」で分類し、類似した概念を整理した。学習者タイプに関しては、大串(1990) が行った生涯学習者調査において、様々な生涯学習活動をグルーピングしており、その中で語学学習は、趣味型、実用技能型が多かったことから、今回の研究ではこの2タイプを学習者タイプとして採用した。
④ 学習者タイプと学習期の分類から、他者との関わりが動機づけに影響を与えたストーリー（変化前、変化点、変化後）の概念（SCAT分析の手続きにより抽出された構成概念）を「入門期―生活趣味型」「継続期―生活趣味型」「入門期―実用技能型」「継続期―実用技能型」の4タイプに整理し、他者と関わりに効果がある条件を検討した。
⑤ SCAT分析で抽出された構成概念を学習期の「入門期」「継続期」の2分類に整理し、動機付け変化の要因を検討した。

6. 結果と考察

20人を4つのタイプに分類したところ、入門期―生活趣味型は5人（30代2名、40代1名、50代1名、60代1名）、継続期―生活趣味型は6人（30代2名、40代2名、60代2名）、入門期―実用技能型は4人（20代1名、30代2名、50代1名）、継続期―実用技能型は5人（30代1名、40代3名、50代1名）であった。4つのタイプそれぞれに、調査対象者がほぼ均等に分布していた。外発的動機づけにかかわる理論と学習理論を参考にして、タイプごとに他者との関わりが学習動機づけに与える条件を検討した。

タイプ別の他者との関わり

「入門期―生活趣味型」は、関心を行動に移した学習者であり、学習そのものが楽しいと感じている。変容的学習理論に照らして考えると、自らが持っている準拠枠の妥当性についての判断で矛盾によって生まれたジレンマに困るものの、ジレンマの解決過程、準拠枠再構築も趣味として楽しむ。しかし、応用の即時性は非常に期待しており、自己主導的で自律性が頼りの学習時期である。ゆえに、学習初期にがっかりして動機づけが下がるというライン（図1の①）が描かれることが多い。効果のある学習の構成的、自己調整的、状況的学習、累積的については、まだ知識、スキルともに不足している状態であり、形成的客観性のフィードバックを効果的に活用出来ない状態である。他者との関わりが学習動機づけに効果を与える条件を考察すると、「同じような学習レベルで、相性が良く、仲間意識が持てる関わり」と考えられる。

「入門期―実用技能型」は、社会的役割による発達課題から学習を開始する者が多く、短期間で成長したいと考えている者が多い。また、趣味型から実用技能型に変化する者も少なくない。変容的学習理論に照らして考えると、自らが持っている準拠枠による妥当性の判断によって生まれた矛盾とジレンマ、特に有能感の傷つきによるストレスの解決について準拠枠再構築がタイミングよく行われるとはかぎらず、大きく動機づけを下げてしまう者も少なくない。効果のある学習については入門期―趣味型と同じで、効果的活用はまだうま

く出来ない状態である。感情が持つ動機づけの役割では、自己効力感について非常に敏感であり、目標設定は資格試験や仕事での活用であることが多く、成果期待として、学習の成功に結び付けたいと考えている。以上のことから他者との関わりが学習動機づけに与える効果の条件を考察すると、「相性が良く、同じような課題を持った学習者同士の関わり」と考えられる。

「継続期―生活趣味型」は、学習が生活の一部として自然なことと感じている。変容的学習理論に照らして考えると、自らが持っている準拠枠の妥当性による判断で生まれた矛盾とジレンマに対する解決経験と解決順序について考えられるようになっており、動機づけが大きく下がることは少なく、ジレンマの解決過程、準拠枠再構築も趣味として楽しむ。学習の応用の即時性も求めるが、自らが持っている関心を満たすことに楽しみを感じており、自己主導的で自律性が高く、動機づけの波が少ない。効果のある学習では、知識もスキルもある程度有り、形成的客観性のフィードバックを効果的に活用できる。感情が持つ動機づけの役割では、価値判断としては楽しいかどうかが重要であり、自己効力感についてジレンマが生まれないようにコントロールしている。分析結果を確認すると、動機づけを下げる理由は「相性の悪い人、会いたくない人との関わり」であった。以上のことから他者との関わりが学習動機づけに与える効果の条件を考察すると、「楽しさの共有」と考えられる。

「継続期―実用技能型」は、社会人としての道具を充実させる目的で学習を継続してきた者たちである。変容的学習理論に照らして考えると、継続期―生活趣味型と同様、省察と準拠枠変容の経験者として、ジレンマで動機づけが低下することはない。効果のある学習では、継続期―生活趣味型と同様、知識もスキルもある程度有り、形成的客観性のフィードバックを効果的に活用できる。動機づけの役割では、目標設定を決めて、資格試験や仕事での活用を意識していることが多いが、ストレスにならないようにコントロールしている。以上のことから他者との関わりが学習動機づけに与える条件を考察すると、対象言語の外国人との交流経験、仕事上の経験、学習方略など、他者との「経験の共有」と考えられる。

学習期における他者との関わり

入門期と継続期の成人学習者を比較すると、動機づけが変化する頻度に明らかな違いがあった。モチベーション変容グラフを確認すると、入門期は動機づけを失う波の頻度が多く現れており（図1の①）、継続期は波がほとんど無かった（図2の④）。入門期の学習者に動機づけ変化の波が多いのは、自らの準拠枠に基づく妥当性の判断（省察）経験がまだ少なく、矛盾やジレンマの発生に至ってしまう機会が多いからではないだろうか。一方、継続期の学習者は矛盾やジレンマを幾度か解決してきた準拠枠変容経験（準拠枠変容の再構築経験）の多さが波の少なさに関係していると考えられる。言い換えると、準拠枠変容経験が多い継続期ゆえに動機づけ変化の波が少いとするならば、入門期は準拠枠変容経験が少ない状態ゆえに、準拠枠に基づく妥当性の判断（省察）を繰り返して波が立つのだと考えられる。入門期と継続期を比較することで分かったことは、準拠枠変容の経験の差が動機づけ変化の波の量に影響している可能性があるということである。また、図1の③における動機づけの向上は準拠枠変容経験を獲得したことを意味していると考えられる。これは、「他者との関わりが準拠枠変容経験獲得の手伝いをした」わかりやすい例である。自らの学習動機づけを向上させるための工夫において、準拠枠変容の経験を獲得することは重要であり、準拠枠変容経験獲得の手伝いをしてくれる「他者との関わり」は学習動機づけの維持向上に効果があると考えられる。

7. 結論

本研究の特徴は、街中にある一般的な語学教室に通う高齢者を含む成人学習者において、動機づけを他人が与えるという視点ではなく、自らの動機づけを向上させるための工夫を検討したところにある。他者との関わりは知の獲得に有利であり、多様な経験・価値観に触れることができ、特に動機づけが低下している場合には認識の違いを気づかせてくれる存在であり、新たな準拠枠を獲得する手伝いをしてくれる存在ではあるが、学習タイプごとに他者との関わりが学習動機づけに与える効果の条件が異なるのではないかという視点で検討してきた。各タイプごとの効果が得られる条件で共通していることは、自分の経験を理解できる者との関わりである。さらに、「相性の良さ」も条件に加わるが、他者との関わりは弱いつながりほとんどであった。入門期と継続期の学習動機づけの低下頻度の差に焦点を当てて検討した結果、準拠枠変容経験を積

むことで継続期の学習者に変遷することを指摘できた。他者との関わりは準拠枠変容経験獲得を助け、準拠枠変容経験が獲得できれば学習動機づけが向上する。つまり、他者との関わりが学習動機づけ向上に効果がある場合、その要因は「準拠枠変容経験獲得の助け」である。以上得られた知見から結論として、成人の学習者において他者との関わりが学習動機づけに与える効果は、「準拠枠変容経験の獲得」に関連があることを明らかにした。

本稿では時間的な制約があったため対象を絞り込む必要があり、性別比較、年齢比較といった詳細な分析は行えなかった。特に、高齢者の学習動機づけ向上はまだ明らかにされていない部分が多く、今後の研究が求められる。

本研究の調査にご協力いただきました成人学習者の皆様方、安藤研究室に深く感謝申し上げます。

文献

秋山豊 2012 大学通信教育における生涯学習支援の推移と動向 大正大学大学院研究論集 36, 197-206.

アスコー朋子 2013 英語クラスにおける学習意欲向上・維持の一考察 〜ドルニェイの英語指導ストラテジーを用いた学生・教員両サイドからのパイロット研究〜 国際経営・文化研究 17 (2), 45-62.

金井壽宏 2012 自分や周りの人のやる気に働きかける（パーソナルセオリー），鹿毛雅治編 2012 モティベーションをまなぶ 12 の理論 金剛出版 , 335-371.

Corte, E 2010 佐藤智子訳 2013 学習についての理解の歴史的発展 立田慶裕他 監訳 学習の本質：研究の活用から実践へ 明石書店 , 43-80.

Boekaerts,M 2006 中澤智惠訳 2013 教室での学習において、動機と感情が果たす重要な役割 立田慶裕他 監訳 学習の本質：研究の活用から実践へ 明石書店 , 107-129.

Mezirow. J 1991 金澤睦・三輪建二 監訳 2012 おとなの学びと変容的学習とは何か 鳳書房

常葉美穂 2004 変容的学習 , 赤尾勝己 編 生涯学習論をまなぶ人のために　世界思想社, 87-114.

上淵寿 2012 自分の学習に自分から積極的にかかわる（自己制御学習），鹿毛雅治編 モティベーションをまなぶ 12 の理論 金剛出版 , 281-290.

大串兎紀夫 編 1990 日本人の学習 成人の学習ニーズをさぐる - NHK 学習関心調査 '82・'85・'88 報告書 第一法規出版 , 195-204.

大谷尚 2007 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 ―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54 (2), 27-44.